

町と子どもたちの未来のために

かつて家庭や地域は、子どもに希望を託し、未来を重ねました。しかし、その思いは近年薄れつつあります。いつの時代も子どもたちは次代を担う存在であることに変わりはなく、子どもたちの将来とわたしたちの未来はつながっています。子どもたちに蒔いた種は、成長の過程で開花します。その可能性は無限大です。だからこそ、教育に完璧な手法はなく、常に子どもたちの学びを模索する必要があります。いまの教育に無関心であることは、学びの芽が枯れ、将来のまちの展望が閉ざされるのを見逃すことを意味します。わたしたちは学びと体験の種をにぎり、子どもたちに蒔き続けなければなりません。

このまちの「共育」を実現するためには、まずすべての大人が子どもたちの姿に目を向け、同じ方向を指すことが必要です。わたしたち一人ひとりに、できることがきつとあるはず。子どもたちに向けられた未来へのまなざしが、いつしか行動へとつながることで、少しずつでも確かに、子どもたちをほぐくむ環境を変えていくことができます。

次代に誇れる「共育」のまちづくりを、いま、ここから。すべては子どもたちとこの町の未来のために…。

子どもたちは、次代を築く大切な宝であり財産。将来のある原石を磨くのも曇らすのも周囲次第です。その成果は、わたしたちの未来に跳ね返ってきます。そこで求められるのが、共にはぐくむ「共育」の実現。それは決して理想ではなく、子どもたちに向けられる一人ひとりのまなざしから創り出されます。

共育の風をこの町から

学校・家庭・地域ではぐくむ

変わらなければ 変えられない

子どもたちをほぐくむ現場を見つめてみると、見えてきたものがあります。深夜まで教材を作る教室の明かり。児童を背負って福智の山頂を目指す後ろ姿。小さな成長に肩をたたいて応える笑顔。先生たちは真剣でした。仕事の疲れも見せず自分の時間を削り、ボランティアで子どもたちと向き合う大人のまなざしを見ました。雨の日も登下校を見守り、やさしく声をかけるお年寄りの姿がありました。地域の大人も一生懸命でした。

しかし、まちを見渡せば、そういった場面はごく一部分でしかなく、そこに携わる人も、ほんのひとりにすぎりであることも現実でした。

子どもたちの学力や今後求められる教育の課題は深刻です。この現状は、激変してきた社会の悲鳴のようなサインなのかもしれません。学校教育の限界や地域教育力の低下が叫ばれ、閉塞的になっている今こそ、学校・家庭・地域が連携して子どもたちをほぐくむ「共育」が必要です。学校の枠にとらわれず家庭や地域を含んだ「共育」の環境づくりが、子どもたちの学びと体験の幅を広げ、

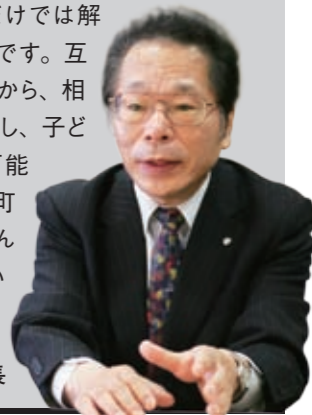
子どもたちの未来を変えます。学校の理念や制度だけでなく、家庭や地域の意識も変わらなければ「共育」のまちづくりは前に進みません。

Interview

人と町の可能性を高める共育

人づくりを将来的な町づくりにつなげることが、教育を施策の柱にしたねらいです。町の教育環境が変われば、子どもたちが変わる。また、教育をとおして子どもたちが変われば、町も変わり、イメージも高まります。将来への展望が持てる教育環境は、定住化と町の活性化につながっています。教育への関心には温度差があるでしょうが、まずは子どもとかわる目線を持ち、共にはぐくむ環境づくりに町全体で参画していただきたい。そのような視点が、将来的に多くの効果をもたらします。現在の教育課題は、複合的な原因によるものが多く、学校だけ、家庭だけ、地域だけでは解決できないものです。互いの連携と協働から、相乗効果を生み出し、子どもたちと町の可能性が高められる町づくりをみなさんと共に目指したいと考えています。

浦田弘二 町長



各校の活動紹介 ⑥ 上野小 伝統文化活動

上野小で地域のボランティアが指導にあたる「琴・三味線」「茶道」クラブ。今年度新設され、互いに交流を深めながら子どもたちの豊かな心をはぐくんでいます。



互いにはぐくみ、はぐくまれて。

福智町高齢者大学を受講するみなさんが、11月11日に市場小で昔遊びを伝えました。高齢者大学と市場小による初めての取り組みです。子どもたちの学びと体験の空間は、大人の体験が生かされ、互いに成長する場。わたしたちはいつでも生きる力を生かし、生かされる関係にあります。新しい「共育」の環境づくりは、互いにはぐくみ、はぐくまれる力と魅力を秘めています。

特集 未来へのまなざし
福智の教育をみつめて／おわり